市民新聞グループ 岡谷市民新聞・下諏訪市民新聞・諏訪市民新聞・茅野市民新聞・たつの新聞・みのわ新聞・南みのわ新聞共通版

ふるさとのお宝再発見 ⑭

この特集をさらにご希望の方は、新聞販売店かお近くのコンビニでお求め下さい

市有形文化財 温泉寺経蔵（輪蔵）と桑原町南町道祖神の社

立川流 目もくらむばかり華麗に

諏訪市

温泉寺経蔵（輪蔵）。八角八面。扉は縦150㌢、横44㌢、観音開き（諏訪市教育委員会提供）

諏訪には、立川流で建物というより華麗な工芸品とも言うべき特殊な文化財があり、不思議なことに、幸いにも続けて見る機会が与えられました。その目もくらむばかりの華麗な作品は、深遠な日本の伝統技術の中に確固として存在する、立川流の名を再認識することとなったのです。

初代立川和四郎冨棟 温泉寺経蔵（輪蔵）

輪蔵は八角八面の回転式の書棚であり、回転させることによって、納められた経文を全て読誦した功徳が得られるとされています（チベット仏教のマニ車も同じ）。本山妙心寺の輪蔵に倣ったとされていますが、妙心寺の輪蔵（公開されていませんが、ホームページの写真を閲覧できます）は規模も大きく、仕掛けも凝っていて、冨棟が実際に見て参考にしたのかは分かりません。近在では長野の善光寺、上田別所の安楽寺、国宝・高山の安国寺にありますが、全国的にも20基くらいで、大変に珍しい貴重な文化財です。基盤の回転部分や頂部は一体どういう仕組みになっていることか、下図がどこかにないものか、興味は深くなるばかりです。完成は1780（安永9）年、冨棟36歳。初期の作品でその精緻な彫刻や細部の造りは見事の一語に尽きます。白壁土蔵の建屋も一体で文化財指定されていますが、不同沈下が発生し改修が必要です。内外とも整備して冨棟渾身の作品を公開、大切に保存していただきたいと思います。

二代立川和四郎冨昌 桑原町南町道祖神の社

この華麗にして緻密、秀麗な社を見れば、下賜したとする高島藩主、技を振るった冨昌、漆や複雑な顔料を加えたり蒼（ラピスラリか）を彩色した塗り師、金物を細工した銑職、金具師、金箔を貼り込む職人、その技量の高さに、さらには保存に気を尽くした人たちの歴史の重みに、ただ感嘆するばかりです。下賜されたが故に棟札はなく、作者は冨昌か宮坂昌敬とされていますが、宝尽くしの作風から冨昌としていいと思います。切妻造、平入り、軒唐破風。正面柱間45㌢、棟高93㌢。保存状態は最良好。このような華麗な宮殿を造営できる職人の粋を諏訪の地へ集める、その状況は一体どのようなことなのでしょうか。江戸末期の飢饉や幕末維新を間近に控えた環境の中で、下賜するまでに至る経過には、壮大なドラマがあったのではないでしょうか。奇しくも温泉寺廟所には歴代藩主が眠っています。夢の中に現れて教えてもらえないものでしょうか。立川の彫刻の中には珊瑚や黒水晶、硝子など流通の経路など考えられない多くのパーツを見ることができます。

桑原町南町道祖神の目もくらむような社全景

社正面。兎の毛通し（うのけどおし）は菊花。虹梁中央蛙股（かえるまた）に諏訪梶の葉紋が見える。その上部は龍。梁を支える力神の蒼緑色はラピズラリか。宝尽くしは右から宝珠、打ち出の小槌（こづち）、巾着、宝珠、隠れ笠、隠れ蓑（みの）、宝珠

さて、この社が納まる箱の狭い左右の空間にカメラを入れて、彩色された華麗な宝尽くしを写しました。素人の写真技術の稚拙さに目をつぶって見てください。社の裏側は見ることはできませんが、何があるのか興味津々です。

桑原町南町と、諏訪市博物館に、箱から出して展示していただきたいとお願いしました。「百聞は一見に如かず」。フルカラーで初夢に見るくらい期待して待ちましょう。できれば矢島天伯社と並べて見ることができたら素晴らしいと思います。

道祖神と社を護るのは、冨昌の狛犬。角や宝珠の珠を乗せ、漆の台に乗っています。四方を護るように置かれていたのでしょうか。丸に諏訪梶の葉の4本足の家紋入りの金灯籠も4基あり、一緒に下賜されたと思われます。

道祖神の古さにも驚きます。男女組の2組ずつ計4組。元は一体どこに鎮座していたのでしょうか。

諏訪の桑原は文化と歴史の宝庫です。

（岡谷市文化財保護審議会委員、諏訪市文化財専門審議会委員で、諏訪総合設計代表の宮坂正博さんに執筆していただきました）

社殿左側（写真左）の宝尽くし。右から宝珠、巾着、宝珠、宝やく（蔵の鍵）、隠れ蓑、巻物、打ち出の小槌、七宝に花角。蛙股には鳥（判別困難）と牡丹。右側（写真右）は、右から熨斗鮑（のしあわび）、巻物、隠れ笠、分銅、丁子、打ち出の小槌、軍配、宝珠。蛙股は梅に鶯か

宝珠の珠と角を頭上に狛犬４頭（２頭には冨昌の銘がある）

道祖神。抱き合い幸せそう。どのようなドラマのもと華麗な社に引っ越したのでしょうか

次回は富士塚（南箕輪村）を紹介します。